

島根半島にみる巨石信仰をもたらした地質学的基盤

Geology to understand the megalithic religion in the Shimane Peninsula: A case program of the Kunibiki Geopark Project, Shimane University

*野村 律夫¹、高須 晃²、入月 俊明²、林 広樹²、辻本 彰¹

*Ritsuo Nomura¹, Akira Takasu², Toshiaki Irizuki², Hiroki Hayashi², Akira Tsujimoto¹

1.島根大学教育学部、2.島根大学総合理工学研究科

1.Faculty of Education, Shimane University, 2.Interdisciplinary Faculty of Science and Engineering

最近、出雲の巨石が注目されている。島根大学のくにびきジオパーク・プロジェクトが主催した10月下旬の探訪会には、30名を超す参加者が出雲市坂浦町にある立石（たていわ）神社を訪れた。そこには今、社殿はないが、12mを超す巨石がご神体として鎮座している。アニミズムの象徴といえるこの巨石は、単なる石ではなく、古来より磐座（いわくら）や石神とよばれる神そのものとして人々のなかに息づいている。ここでは島根半島にみるジオサイトとしての巨石の成因と我々のジオパーク活動の方針について報告する。東西約70kmにも及ぶ島根半島を西の日御碕から東の美保関までみると、山塊が分かれて少しずつ雁行状に日本海側へずれていることに気がつく。この構造は、今から2000~1500万年前に西南日本弧が大陸から分離し、日本海が形成された地殻変動と密接に関係している。半島地域の変動は、1100万年前まで続いているので、日本海が広がった頃を1700~1500万年前とすると、約400~600万年かかって島根半島の構造的な原形が造られたことになる。この時の地殻は、北西-南東方向の圧縮応力場にあり、著しい変形と変異を受けたため、島根半島は全国でも有名な宍道褶曲帯として知られる。大社の山塊の南麓には、落差が1000mの巨大な大社断層があり、北側の平田付近には弓のように窪んだ向斜構造が形成され、その構造は宍道湖へとつながっている。鹿島町の古浦海岸から美保関にかけて存在する宍道断層も大社断層と同じ性格をもち、半島の形成に参加した。島根半島には、これら二つの断層と平行した多数の断層が形成されているのが特徴で、巨石形成の最も大きな要因の一つになっている。立石神社の巨石も宍道断層の西方延長上につくられていることが、巨石の裏面や大小の割れ目に発達する擦痕からも理解できる。このようなことから島根半島に見られる多くの巨石は、島根半島の形成に伴ってできた地殻変動の結果である。古代出雲の人々は、1300年も前に島根半島の形成に基づいた地形を反映させて、国引き神話を語っていた。風土記時代から詳細な地形分析がなされていたことは驚くべきことである。

キーワード：島根半島、くにびき神話、巨石信仰、大陸移動説

Keywords: Shimane Peninsula, Kunibiki myths, megalithic religion, Continental Drift theory